
カメレオンキャンデーの魔法石

衣魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カメレオンキャンデーの魔法石

【Nコード】

N0685Z

【作者名】

衣魚

【あらすじ】

小学生時代、ぼくと音田さんは毎日のように「魔法使いごっこ」をしていた。けれども容赦なく時は経って、ぼくたちはいつのまにか高校生——大人に近づこうとしている。久しぶりに再会したぼくたちは、昔を懐かしみながら「魔法使いごっこ」をする。

午後九時。箒を持っていつもの場所へ向かう。

役所が景観を保つために作った、空から見た丘陵のような芝生公園。その中央にある屋根つきの休憩所が、ぼくたちの魔法使いごっこの場所だ。

脚の太いベニテングダケのような外見をしたその休憩所の前で、音田さんはばんばんに膨らませた筒型のスポーツバッグを斜めがけにして立っていた。もちろん片手に、竹箒をたずさえて。ベニテングダケの中からもれる白い光が、周りの芝生を緑のゼリーみたく輝かせている。

「弟子が師匠より遅れて来るとは何事だ」

「ごめんごめん。いろいろあつて」

「……いろいろとは何だ。理由によっては許してやらんでもない」

ぼくは腕を組む音田さんを見ながら、理由を考えるふりをした。音田さんは魔法使いごっこのとき、たいていラフな格好をしている。今日はロゴ入りのシンプルなTシャツにスキニージーンズ、裸足に水色のクロックス。バイト先のコスプレ喫茶でやけに凝った格好をさせられるから、その反動なのだそうだ。

髪はツインテールにしたりポニーテールにしたり、でもだいたいは今日のように何も手を加えず、長い長い髪の毛先を腰元にふわりと浮かばせている。髪が多いせいかな、音田さんはいつも淡いシ

ヤンプーの匂いをまとっている。その匂いに、ぼくは時々ぼーっとなる。

「そうか答えられないか。なら仕方がない、できの悪い弟子には…よつと、」

音田さんは箒を休憩所に立てかけて、バッグの中身をかき回し、

「ばっつ、ゲーム。だ」

オロナミンCでも入っていそうな、褐色の小瓶を取り出した。傾けると、ちゃぽんと微かに水の音がした。

「なに、それ」

「大魔女である私が特別に調合してやった、魔力増幅飲料ゲンドリルだ。魔力を格段に高めてくれるが、体外に排出されるまで苦味や不快感が持続する、」

飲め。

言いながら音田さんは小瓶の底を頬に押し付けてくる。ぼくはそれを受け取ると、キャップを外してまず匂いを嗅いでみた——薄く、草のような匂いがする。大丈夫だろうか。小学生のとき、ぼくは同じ風に渡された魔法飲料で全治三週間の胃炎を発症してしまったことがあるのだ。

「なにをためらっている。早く飲め」

音田さんはそんなことを言いながらも、思い当たることがあったのか、大魔女の表情を崩して苦笑いした。

「……大丈夫だ。死んだりはしない」

ぼくは小さく頷いた。最後に一回だけ匂いを嗅いで、それから小瓶に口をつけ、中身を一気に口の中へ注ぎ込んだ。とたんに舌の水分を搾り取るような渋味と苦味が、喉の奥まで貼りついて取れなくなる――

「につ、につがああああうええええ！」

が、そんなにではない。おばあちゃんが時々作っていた、どくだみ茶の味と似ている。

「ふっ、ふっ、ふっ。それもお前を想ったのこと、いわば愛のムチだ。そのすさまじい苦みにちよつとの間もがき苦しむがよい。……さあ今日は座学から始めるぞ、スモールスモールスモールウィッチよ」

音田さんは得意気に鼻をつんと空に向けてから身をひるがえし、休憩所の中へ入っていった。ぼくも箒を休憩所の壁に立てかけて後続いた。

ベニテングダケの中身は円形ベンチになっている。壁にそって座面が取り付けられており、それを丸い天井の中央にある蛍光灯が白く照らす。地面は乾いた砂のこびりついたコンクリート。

「やっぱり、少しばかり賢くなっちゃったせいか、あまり無茶なことはできないようになってるな」

音田さんはバッグをベンチに置くと、自らの身体もベンチにこっそりと乗せた。ぼくはバッグの横のスペースへ腰かける。ぼくと音田さんの間をバッグが隔てている配置だ。

「ぼくにむかし飲ませたあの魔法飲料、いったい何入れてたの？　なんか、ものすごく甘かった気がするんだけど」

「……ほう、甘かったのか」

「あ、でも。酸っぱかった気もする。ああ酸っぱいっていうより、塩辛い感じだったかも」

「ほうほう。塩辛かったのか」

「で、いったい何入れてたの」

「それは………秘密だ」

なんじゃそりゃ、とぼくは笑い、音田さんはバッグのジッパーを開け何か探り始める。そうして取り出した袋には、舌の上に飴を乗つけた、コミカルなカメレオンの絵が描かれていた。

「カメレオンキャンデー。口直しに一つ、マヒロにもやろう」

「おっ、懐かしいね。ありがと」

正露丸をそのまま大きくしただけのような外見の飴を、音田さんが食べるのを見届けたあとで口の中へ放り込んだ。最初はコーラ味。このカメレオンキャンデーには小学生時代の思い出が詰まっている。

「口の中で色と味が変わるんだったよね」

そして色が変わったものを魔法石に喩えて、ぼくらはいろいろと収集していた。

「黄色いのがノーマルな魔法石で、緑色が使い捨てのショボ魔法石で、」

「出現率の低い赤が神聖なるオーデインの胆石だ」

「胆石……」

「胆石はまだ私の家でコレクションされていたはずだ。明日取ってきてやろうか。もつとも、どんな色でどんな匂いをたてているかはさっぱり分からないが」

ぼくは思わず笑い声をあげてしまう。

「いいよいいよ。絶対おぞましいことになってるし」

「実際の胆石により近づいているかもだな」

それにしても、よくこんなこと考えついたもんだな、とぼくは少し感心してしまう。一度口に含んだ飴をコレクションするなんて、たぶん小さい頃にしかできないことだ。できるできない以前に、大人は思いつかないかもしれない。得体のしれない液体を作って、それを平気で飲んでみせたり、あぐく腹を壊したりして——それでもそんな遊びを毎日続けていたあの頃。

あの頃のぼくは、何であんなに楽しかったのだろう。なんであんなに熱中していたのだろう。

「マヒロ、そろそろ色が変わっているかもしれないぞ。せーので出そうか。魔法石の精製だ」

気づけば飴の舌触りがなめらかになって、味もさっきとは違った甘さになっていた。「うん」とうなずいたあと、ぼくは自分の唇に指をあてた。

「せーの」

ぼくの飴は緑色に変わっていた。青リント味。使い捨てのシヨボ魔法石。音田さんは——

「紫色」

ぼくが訊ねる前に、音田さんは飴を見つめながら言った。指の中にある、唾液にまみれたその飴の色は、たしかにうっ血したような紫色をしていた。そうして音田さんは、うっすらとしか聞こえないような声で呟く。

「胎内に宿っていた悪魔の胎児を、この中へ封入した」

紫色は最もレアな色だ。赤よりも出現率が低い。だけどその色が意味するのは、ぼくらのなかでは最悪のことだった。魔法石でもなんでもない。これは悪魔の宿る石なのだ。

なぜ一番レアなこの紫色が最悪な結果なのかと言うと、カメレオンキャンデーのパッケージに答えがある。もともとこの飴は、出た飴の色で占いができる、という趣旨のものだ。パッケージの裏面に書いてある一覧表に、出た色がどんな運勢を示しているのかが載っている。

赤色が、とってもしあわせ。

黄色が、ちょっとしあわせ。緑色がまあまあで、

紫色の説明はこうだ。

——しあわせはとおいよ。

そして、ぼくらはこんなルールを取り決めていた。

体内に宿っていた悪魔の胎児を封入した玉は、他人によって噛み砕かれなければならない。

そのまま本人が食べてしまうと、せっかく回収した悪魔がまた胎内（この頃は意味も分からずただ言葉の響きだけで使っていた）に戻ってってしまうし、外に放置したままにしておく、やがて悪魔が生まれて地上を滅ぼしてしまうのだ。

だから、他人に噛み殺してもらわなくちゃいけない。不幸を互いに分け合って、被害を軽減させなくちゃならない。

「マヒロ」

ぼくはそう声をかけられたのにもかかわらず、音田さんのことを直視できなかった。「なに？」と聞き返しながら横目で見ると、音田さんはまだ紫色の飴を見つめている。

たった一度だけ、音田さんが出した紫色の飴を噛んだことがある。味はよくあるブドウ味だったけど、そこにはなまあたたかい体温が、唾液がからみついていて、それを意識するだけで全く別の味に思えてきて、ドキドキした。頭が熱くなって、どうにかなりそうだった。

「……やっぱり、なんでもない」

音田さんが紫色を口の中へ放り込むのが見えた。その直後、飴の碎かれる音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0685z/>

カメレオンキャンデーの魔法石

2011年12月2日20時58分発行